

が擧げられ、他にアマモ、コアマモ、ウミヒルモの海草も見られた。

(岡山大學理學部生物學教室)

## 岡村先生の思い出

山田幸男

我が國海藻學の父岡村金太郎先生が逝去されたのは去る昭和10年8月21日であるからそれから此の8月21日までに滿19年が夢と過ぎた譯である。丁度この21日の朝自分は家人に向つて19年前の今日明日又23日も東京は随分暑くて御通夜の晩等も帷子でも汗が流れて困つたがこの今朝の涼しさは何ということだろう。今日が先生のなくなられた日と同じ日等とは逆も想像も出来ない等と話したのであるが、然しこれは北海道は札幌での話しで東京は矢張り40何年ぶりの暑さであつたというから、東京では矢張り先生の御命日にはふさはしい暑い日であつたといえようか。兎に角あれからもう19年の歳月が流れたことは否めない。其の日、先生から頂いた御手紙をあれこれと読み返して憶い出を新にしたが年々先生の筆蹟が読みにくくなつてゆくことを感じて悲しさを覚えるのである。それは先生の御手紙は仲々読みにくく、始終御手紙を頂いて読み慣れていた時にはスラスラと讀めたのであるが御逝去後は勿論新に御手紙を頂く機會もなく自然に先生の筆蹟が読みにくくなつて來たのである。此處に昭和4年12月 W. H. HARVEY の標本を勉強する爲にアイルランドのダブリン市に滞在中先生から頂いた御手紙を御披露してなき先生を偲ぶよすがと致し度い。

11月25日、昨日は朝9時頃5°C、本年の最初の寒さ。

何より悦しき事は恩師 FR. SCHMITZ の肖像を得たことです。早速机上に供へ拜謝しました。實に我邦海藻學の大恩人、多年その小影に接し度いと見ておたもの故一層嬉しく存じ候、厚く御禮申候。藻類系統學(書名を斯くしました)も今褐藻類の初校を了つた丈けです。多分來年3月頃發賣となることとせう。

SAUVAGEAU: Sur l'alternance des generations chez le *Carpomitra ca-*

*breariae*, 1926. これは Biol. abstr. で見て早速間に合ふた故本文を訂正して入れて置いたが原書をソーバジョーが呉れなかつたから若し見られたら見させて頂き度い。又 SAUVAGEAU: *Asperococcus fullosus* の life-history も同じく Biol. abstr. で見たが之は間に合はぬ故補遺として入れるつもり。之も若し御入手なら拜見したい。

SJÖSTEDT の書物 3 部御蔭で拜見有難く存じ候本人からは何とも申來らず、勿論書物も送り來らず候。KYLIN は大抵呉れる人だが此頃何か pamphlet が出た様だが送つて呉れなかつた。多分 30 とか 50 部とかより reprint がないから日本人迄には送り足らぬであろう。エバツテいる人の様だからナンダ日本人がとでも云ふ見識なのであろう。見渡す所米國で SETCHELL, HOWE; Kopenhagen で BÖRGESSEN, ROSENVINGE; France で SAUVAGEAU, HAMEL; Lund で KYLIN, SVEDELIUS といふ位が當今の番付にのる第一流所か、此等の人々の批判は大抵よくわかつている様だが KJELLMAN の分類の手腕に對する批評は始めて知り申候 *Galaxaura* 等も少し sp. が多く分れ過ぎていると思つて居り候其點になると SETCHELL など少しどうかと思はれ候。殊に GARDNER の *Gelidium* などは尙更と存じ候。兎も角エライ人は學問に忠實と云ふか自説に忠實と云ふか自説を枉げない様だが之は考へ物だ。HOWE であつたかの *Scinaia latifrons* かは大方日本の rib (costa) あるものと同じならんと思ひ候。HARIOT の Alg. de Yokoska の批判は是非日本人の君の手で書いてやるがよい。トージンの鼻をスコシ小粒のサンショウでピリッとさせてやるのがよい。痛快!

WEBER VAN BOSSE のおばあさんは定めし遠方であることか御會ひではない様でしたが定めし 70 以上の老人とのこと、僕の寫眞を定めし諸所で御披露になつた事でしょう。面と向つての事故御世辭タラダラであろうが然し隨分色々の批判のある事でしょう。時々クシャミする事があるから! 圖譜も今年中に 6 卷第 2 集を出し今第 3 集の 2 枚だけ銅版が出来、第 5 集迄は画が準備してある。君が歸つて來てから少し教へて貰つたら第 6 集の材料には困るまいと御歸りを待つて居ます。諸所の Herbarium を見たので從來の疑はしいものが大方判明した事であろう。例へば *Vanvoorstia*, *Talorodictyon* (之はどうだか), *Chondrus platynus*, *Gigartina punctata* (*Chondrus ocellatus*), *Chondrus punctatus* in SURINGAR'S Alg. Japon. (= probably *Ch. ocellatus* or *Grat.* sp) の様なものが知れたことと思う。尤も *Ch. platynus* は GOBI

か何かだからロシアに行つて St. Petersburg Univ. ででも見なくては……。

今私は藻類名彙の再版(3版)にかかつて今度は各種の記載と各属に1つ宛繪を入れるつもりで今 Chlorophyceae の本文丈け了り之から Phaeophyceae にかかる所です。三年位かかるでしょう(中略)。

此の4月3日から自分は自宅で海藻の講義をしてこの11月で第2回を終る。來年4月迄冬の中は設備がないから休んでまた4月から第3回をやる計劃、前後2回で12~13人位の聴講生が出來たわけです。

東京を離れて旅の空でみたら定めし東京がどんなになつたかとは夢寐にも思はれる事であろうが餘り變つた事はない。まだ日本橋通りを元の通り電車が通うて居て地下鐵も相變らず淺草と上野間丈け、今折角万世橋迄工事中だが自分は未だ一度も試乗せず、淺草の觀音様も御無沙汰です。所々方々ほりかへして茅場町の所や越中島へ來る橋の所などは田の様で毎日閉口。學會も變りなく植物學の社會も天下太平。

尙老婆心を以て付記すれば上の御手紙中の「藻類名彙の再版(第3版)」とあるのは先生の御逝去の翌年に出版された日本海藻誌のことで、當時は未だこの書名は出來ていなくて藻類名彙の第3版として出版する積りでいられたのである。  
(北海道大學理學部植物學教室)

## 故岡村金太郎先生の想い出

—— 紀伊瀬戸採集隨伴記 ——

木下虎一郎

「藻類」創刊號、卷頭の山田先生の高著をはじめ、每號、隨所に故岡村金太郎先生の御名前を拜見する。本邦海藻學の鼻祖として當然のことではあるが、今更乍ら先生の赫々たる遺業を偲び、追慕の念の禁じ得ないものがある。茲に紀伊瀬戸採集隨伴記を草し、先生の想い出とする。

× ×

岡村先生の紀伊瀬戸の採集は、昭和5年7月と6年8月及び7年4月の3回に亘つて、京大瀬戸臨海研究所(現在の白濱町、京大臨海實驗所)を根據